

スペイン語圏を知る本（その58）

坂東省次・川成洋編 『日本・スペイン交流史』

（れんが書房新社、2010年）

評者 片倉 充造



『スペインと日本』（行路社、2000）と同じ編者による表題書は、近・現代期の両国交渉をも幅広く補完し、「第一部近世初期の交流史」8章、「第二部幕末明治以降の交流史」20章とで構成される、斯界の権威松田毅一著作集にも連なる体系的な専門書である。スペイン国駐日ミゲル・カリエド大使の「刊行に寄せて」と「編者まえがき」はイエズス会ザビエルによるカトリック布教の実践（1549）から現今のファン・カルロス国王夫妻訪日（2008）までの壮大なる両国交流史の概要であり、格好の読書案内（導入）でもある。

「第7章スペインと日本」（川成洋）は、「スペイン内戦」時における共和派への日本人義勇兵の消息を中心に、多岐にわたる膨大な資料に基づき考証を進める、硬質の精力的な論稿である。有事の緊張感に包まれた題材でありながらも読者を飽きさせない健筆は、〈スペイン内戦史研究〉の第一人者ならではの広博な学識によるものであろう。

「第15章スペイン語に翻訳された日本文学の流れ」（古家久世）の論述では、スペイン語に翻訳された最初の日本文学作品、新渡戸稲造『武士道』（G・J. デ・ラ・エスバダ訳、マドリード、1909）から説き起こし、日清（1894）・日露（1905）両戦争での台頭をもって海外における日本への関心が高まったこと、スペインで日本文学熱が昂じたのは川端康成のノーベル賞受賞（1968）が契機となって順次諸作品の翻訳化が進んだこと等が明らかにされている。日本語から英・独・仏語などを経て西語への重訳に依存することが主流だった時代から、川端受賞後原書から直接西語化される時代を迎えるに至ったその背景には、J・フェルナンデス（上智大学）『古都』、『沈黙』、A・カベサス（京都外国語大学）『伊勢物語』、『好色一代男』、J・ロドリゲス（天理大学）『徒然草』、『子規百句』のように日本文化に精通したスペイン人識者による着実な文化貢献が大きかったことや、三島由紀夫割腹事

件（1970）、大江健三郎ノーベル賞受賞（1994）といった社会的トピックが指摘される。吉本ばななや村上春樹人気もこれまでの延長線上にあると見られる。

「16章スペインにおける日本のポップカルチャー」（金関あさ）では、スペインにおける日本アニメ・マンガの輸入に着目し、『クレヨンしんちゃん』の大人気を基軸に分析を試みる。スペイン国内だけでも5言語に翻訳されTV放映も広く続けられる作品には、「子供向けのマンガではない」とする原作者臼井義人の主張への理解が、高視聴率の根底にあることなどが解説されている。こうした両章の事例は、文化的相互理解・相互信頼は、言語表現を介してさらに深化・進展することを物語っている。具体的には、漱石『猫』の西語訳・研究書やセルバンテス『ドン・キホーテ』の邦訳・関連書も、数々の刊行が様々な批評を展開し、言語文化を豊潤にすると評者は確信する。

「第19章スペインを訪れた日本人」（坂東省次）は、既刊『スペインを訪れた日本人』（行路社、2009）の要諦が凝縮された言わば、ダイジェスト版に近く、明治期以降スペインへ渡航した著名人（＝民間人エリートたち）の記録を丹念に精査し、蓄積・集成する。同章「7まとめ」での「日本におけるスペイン学の基礎を築いたのは他ならぬノンプロパーたち、つまり作家、外交官、評論家、新聞記者、舞踊家、俳優たちであった。（略）1970年代あるいは80年代になるとプロパーの手によるスペイン論が登場してくる。」（p.466）という分析は、有本紀明『スペイン聖と俗』（NHK出版協会、1983）を基点に、〈スペイン学〉を研究者自らが積極的に構築する本格的な段階に入ったことを証言するものであり、日本の〈スペイン学〉大系の確立を編者が重ねて公言する論拠でもある。

かたくら じゅうぞう

（天理大学教授：スペイン・ラテンアメリカ文学）